

# 韓国カトリック教会の起源に関する一仮説

— 長崎と朝鮮人 —

李世勳 トマス・アクィナス

長崎大学多文化社会学部 外国人客員研究員

はじめに

今日は韓国カトリック教会の起源に関する一仮説（長崎と朝鮮人）という内容でお話をいたします。敢えて韓国カトリック教会の起源に関する一仮説、仮説という言葉を入れてまで皆さんの前でお話することには理由があります。今日の内容が、歴史的な証拠や資料の制約もあって、明確な裏付けに欠ける部分があることは自分でも認識しております。しかし本音では、今日の話に皆さんが関心を持って、とにかく長崎と朝鮮人とかわること、何でも結構ですのでぜひ教えてほしいと思います。今日話す時代は、江戸初期1600年代前半の話ですが、特に朝鮮人が長崎に奉納した聖ロレンソ教会の跡地、朝鮮人が集団で居住した鍛冶屋町、皮田町、新高麗町での朝鮮人の生き様、そしてその子孫の移り変わり、などに関するものは何でも構いません。ご存知のようにもともと長崎学というのは様々な分野で研究者も多く、非常に長い研究蓄積がありますが、とかく朝鮮人に関する切りはなかなか見当たりません。ある意味空白となっているような気がします。そういう意味で私一人ではどうしても制約と限界がありますので、皆さんのお助けが得られればありがたいと思って訳です。「近世長崎と朝鮮人（資料集）」でも作れば何よりです。それでは前置きが長くなりましたが、本題に入りましょう。

近世の日本中国韓国におけるカトリック教会の起源については、日本は1549年鹿児島に上陸したあの有名な聖フランシスコ・ザビエルによって、そして中国はイエズス会 東インド巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノが1579年と1582年、其々中国に派遣したミケーレ・ルッジェーリ神父、マテオ・リッチ（李瑪竇）神父によって始まったことが定説としてよく知られています。『天主実義』で知られるマテオ・リッチ神父はアレッサンドロ・ヴァリニャーノの直接の教え子でもありました。こうして日中とも1550年代以後大航海時代の真ただ中、16世後半の出来事ですが、果たして朝鮮はどうか。朝鮮だけ取り残されていたのか。これが今日の話の出発点です。

## 1. 韓国カトリック教会の起源に関する諸説

そもそも、教会の起源は何を基準に判断するのか。司祭と信者がいて、その間に典礼と洗礼と告解（いわゆる赦しの秘跡）が行われているかどうか。外形として教会が存在するかどうか。これも様々な議論があり得る訳ですが、私の認識では、仮に司祭がいなくても、建物としての教会がなくても、きちんとした信仰を持つ複数の信者による信仰共同体が形成され、また維持されているかどうか、重要な判断基準になると思います。その信仰共同体が如何に形成され

たかは、当然ながら日中韓とも歴史的背景と状況が違います。ここでは近世朝鮮の状況について見てみます。

これから皆さんに馴染みの薄い朝鮮での人の名前とか、書物のタイトルとか、歴史的出来事をいろいろ並べてもいっぺんに頭に入らないと思いますが、ここではまず、韓国カトリック教会の起源に関する諸説の要点を簡潔におさえましょう。合わせて7つの説があります。①1593年説、壬辰倭乱（じんしんわらん、秀吉の文禄・慶長の役）の時、キリシタン大名小西行長と一緒に朝鮮に入った、最初のヨーロッパ宣教師イエズス会のグレゴリオ・セスペデス神父が朝鮮で洗礼を授けミサを捧げたことが始まりとする説、②1645年説、中国の清による丙子胡乱（へいしこらん、丙子の乱）の時、清に人質として抑留された悲運の朝鮮王子、昭顯（ソヒョン）世子がアダム・シャル神父と交流し、帰国の際に中国人信者5名の侍従を同伴した事実を起源とみる説、③1674年説、教皇クレメンス10世が中国の羅文藻（ラブンソウ）神父を南京教区の司教に任命した祭に、中国だけではなく、合わせて朝鮮の司教職務を任せ、宣教師の派遣等を試みたことが始まりとみる説、そしてそこから100年以上時代が経過した後になりますが、④1779年説、当時の朝鮮の中央政権権力から排除された若い両班（やんばん、注1）南人知識層の実学者達が、今のソウル近郊の京畿道の山奥の天真菴・走魚寺（ちょんじんあむ、じゅおさ）という仏教のお寺に集まって読経する際、中国から入ってきたカトリックの教理書（例えば、先のマテオ・リッチの『天主実義』、パントアの『七克眞訓』など）の書物を勉強しながら討論する過程で、学問から信仰が自生的に芽生えて、信仰共同体が形成されたとする説、

そして、⑤1784年説で、④の影響を受けてそのリーダーの指導に従い、蔓川李承薫（イスンフン）という人が北京天主堂（北堂）でフランス人司祭グラモン神父から朝鮮人最初の洗礼を受けた後、教理書や聖書、十字架、ロザリオ、聖像などを朝鮮に持ち帰って、中人訳官（長崎でいう唐通事に該当）金範禹（キムボムウ、1751-1787、注2）の家、明礼坊（みよんればん、今のソウルの明洞聖堂）に集まって天主教教理を学習し、信仰共同体を形成されたとみる説、⑥1795年説、朝鮮のカトリック教会が祭祀禁止令などでいよいよ迫害に直面する中で、中国のグベア司教が朝鮮の漢陽（はんやん、ソウル）教会の主任司祭として初めて中国の周文謨（シュブンボ）神父を派遣したことを起点とする説、そしてまた大分後になりますが、最後の7つ目は、⑦1831年説、ローマ教皇庁より教会法上、北京教区から朝鮮教区を切り離して初めて朝鮮教区が分離、設定された事実を重視する説、などである。

今のところ、5説が内外的に有力な説となっており、特にソウル大司教区は明礼坊が明洞聖堂とも関係があることから5説を強く主張しています。一方、4説を主張する見解もあって、天真菴・走魚寺が京畿道にあることから、管轄の水源（すうおん）教区がこれを強く主張し、本来は他の地域（仁川、包川、陽洲など）に散在した4説の主要人物のお墓を移転し集めて祀る聖地を彼らが読経をした場所、天真菴があった場所に助成し、そこを聖地化している状況があります。こうして様々な説がある中で、4説と5説が有力な説で、また二つとも人物的にはつながっているわけですが、韓国教会全体の公式的な教会起源に関する定説は未だに定まっていない状況であります。いずれにしても有力説の共通していることは、時期的には18世紀後半、中国からの書物を通じて韓国にカトリック教理が伝来され、宣教師が不在の中、自生的に信仰が芽生えて、教会が始まったという見方を重視しており、またそれが韓国教会のプライドにもなっているところです。

## 2. 学問的な天主教教理の朝鮮への伝来

それでは実際、朝鮮の両班知識人層（実学者達）に学問としてのカトリック教理はいつ伝わったのか。①最初は朝鮮中期に遡って実学の先駆と言われる芝峯李晔光(イスクァン、1563-1628、注3)が1613年に編纂し、彼が死んだ後の1634年にその子孫が刊行した芝峯類説（しほうるいせつ）が挙げられる。その書物の中で初めてマテオ・リッチの天主実義を朝鮮に紹介し、部分的ながら論評を加えていることが最初です。②洪吉童伝（ホンギルドン伝、注4）の著者で朝鮮中期の反逆と異端児とされる許筠(ホキョン、1569-1618)という人物が、使節として中国の清に行った時、祈祷文12端を持ち帰って天主教の書籍を学習し、自ら入信に至ったと言われていますが、定かではない。③次のこの人が大変重要な人物ですが、星湖李瀾（イク、1681-1763）で、南人実学者の巨頭として本格的に天主教の教理研究に没頭し、その後、多くの弟子達を通じて西学（当時朝鮮では天主教を西の学問、西学と言った）研究を広げた人物である。彼の弟子達の中から、先ほどからの学問の領域を超えてカトリック信仰が根付いた一連のグループが生まれる訳ですが、それがまさに先ほど述べた4説と5説の若い両班知識人層です。代表的な人物としては、李蘄（イビョク）、權哲身（コンチョルシン）と權日身（コンイルシン）兄弟、李基讓（イキヤン）、丁若鏞（ジョンヤクヨン）と丁若銓（ジョンヤクジョン）兄弟、そして彼らの指示に従い中国で洗礼を受けた李承薫（イスンフン）など、若い南人実学者がその集団です。

彼ら両班実学者達は、1800年代以後迫害が始まると一部は信仰を守って殉教する人もいますが、学問知識としての信仰の限界かも知れませんが、かなりの人達はやはり棄教、背教してしまいます。しかしそういう事実は、韓国の教会としては面白くない話です。教会の指導者や先駆者となるべき尊敬されるべき人物が迫害の中、背教棄教してしまったという事実は教会としては都合の悪いというか、認めたくない話でしょう。だからいろんな教会内の学者や神父の研究成果という名目で、例えば、李蘄という人は、家門の名誉を守るため毒殺されたとか、李承薫の棄教は表向きで実は生前に信仰を取り戻したとか、あるいは丁若鏞という人は、隠れて教会のリーダーとしての役割を果し続けたとか、確実な証拠に欠けるとは思いますが、様々な理由付けで彼らを守ろうとしています。私はやはり知識人としての信仰の限界は認めるべきではないかと思えます。だからこそ両班知識層の上からの教理学習や浅い信仰と19世紀に入って迫害時代に名もなく殉教した多くの信者、大半は下からの民衆の信仰ですが、その両者の間には断絶があって、区別する別物ではないかと思う訳です。このように従来の通説を再度整理しますと、朝鮮のカトリック教会は4説でも5説でも、1700年代末ごろ、一部先覚的な両班実学者達によって、上から自生的にカトリック信仰が生まれ、彼らを起点としてその後、多くの両班、中人、一般の百姓や民衆にまで階級を超えてカトリック信者が増え、カトリック信仰が朝鮮全土に広がったというのが韓国教会の起源に関する通説と言えらると思えます。

その後、彼ら両班実学者が漢陽（ソウル）や京畿道を起点に、例えば、忠清道は權日身によって入信した李存昌(イゾンチャン1752-1801、韓国最初の司祭金大建神父の祖母と親戚関係)という人物によって、また全羅道は權哲身が入信させた柳恒儉(ユハンゴム、1756-1801)という人物によって、慶尚道は忠清道と全羅道の信者が迫害を避けて移住したことによって信仰共同体が他の地域に広がったとされています。また一つ例を挙げると、韓国教会の最初の司祭金大建神父(キムデゴン、1821-1846、注5)の曾祖父にあたる金震厚(キムジンフ、1738-1814)という人も、先の忠清道に布教した李存昌によって感化され、50歳（計算すると1788年）で入信しました。このように金大建神父の家系の流れをみても、同じく1700年代後半から1800年代前半の韓国教会の宣教歴史の延長線上にあります。そして1800年代に入っていよいよ韓国カトリック教会の4大迫害が起こるわけですが、それは辛酉迫害(きのえとり、1801年)、己亥迫害(きのとい、1839年)、丙午迫害(ひのえうま、1846年)、丙寅迫害(ひのえとら、1866年)とすべてが1800年代に入って迫害が本格化することになります。

そうすると、常識的に非常に気になることは、果たして1700年代後半以前の時期、例えば1650年から1750年の約100年の間、朝鮮はどういう状況であったのか。大変気になりますね。まったくカトリックとは無縁の状況であったのか。先ほど述べたように、ごく限られた一部の実学者が中国からのカトリック書籍を紹介する程度にとどまっていたのか。であればまた一つ大きな疑問が生じます。韓国カトリック教会起源の有力説とされる先ほど説明した4説1779年説とか、5説1784年説とか、また金大建神父の家系で曾祖父の受洗1788年、をみても韓国教会は、1700年代の末ごろに始まる訳で、しかも指導的な両班知識人層の多くは迫害が始まると棄教背教をする中で、その後1800年代に入っていきなり短期間にカトリック信仰が朝鮮全土の民衆の間に急激に広がり、しかも徹底的な階級秩序を超えて、1万人とも言われる多くの殉教者を生み出すほどの信仰の原動力は、果たしてどこから生まれたのであろうか。わずかに20—30年で可能だろうか。韓国教会の奇跡と言えればそれまでですが、どうしても十分な説明にはならないような気がします。

そこで記録や証拠は乏しいですが、1650年から1750年の100年の間、実は朝鮮にはすでにカトリック信仰を受け入れる民衆の下からの土台が作られて存在し、すでに朝鮮の、特に忠清道と全羅道あたりに、一定の小規模な信仰共同体の基盤が点々と形成されていたのではないだろうか。この問題意識を前提に 長崎と朝鮮人の歴史からヒントを得た一つの仮説が浮かび上がるわけです。

### 3. 1600年前後の九州長崎の朝鮮人

今まで説明した近世朝鮮のカトリック教会の状況を踏まえて、いよいよ日本、長崎の話に入りたいと思います。ご存知のように日本での教会歴史の研究は、多くの研究者と研究蓄積があります。日本のカトリック教会の歴史研究は、大きく三つの分野に大別されます。一つは、イエズス会をはじめとする西洋ヨーロッパ宣教師の文献と書簡を通じた研究、二つ目は、教会を徹底的に弾圧した日本の幕府側の古文書を通じた研究、そして三つ目は、250年の長い潜伏を経て再発見された隠れキリシタンに関する研究分野です。

私は日頃、こうした研究の中にももちろん資料的な制約もありますが、長崎の朝鮮人とその教会、彼らの生活と信仰に関する研究はあんまり行われていないように思います。そして自分がにわか勉強ながら、近世長崎と朝鮮人との関わりに関心を持って調べの中で、韓国カトリック教会の起源に関する一つの仮説を思うようになった次第です。これはヨーロッパからの宣教師の報告、書簡、記録等のみをみるだけではなかなか思い付かない仮説です。すなわち、あの時代の朝鮮と日本との関係、特に長崎と朝鮮人との関わり、朝鮮人の生き様などから見えてくる仮説でありますし、今後、より本格的な調査や研究を希望したいところです。こうした研究は本来ならば、韓国教会が関心を持って資金と人材を投入し発掘すべきと思いますが、多分、韓国教会としては、先ほど繰り返し指摘した通り、宣教師に頼らず自生的に信仰が芽生えたとする韓国教会のプライドを考えると、教会の起源が日本からとか、長崎からとかというような主張や研究は、面白くなく、拒否されるでしょう。

まず断片的ではありますが、確認できる既存の資料や研究等を通じて日本の教会歴史の中での長崎と朝鮮人との関係を概略してみましよう。正確な統計はありませんが、壬辰倭乱の後、1610年頃になると、九州地域には約2~3万人の朝鮮人が住んでいたと推測されます。(一部韓国の学者は、10万が捕虜で連れてこられたという主張もある。)

そして朝鮮を侵略した豊臣時代と違ってやがて徳川幕府と朝鮮の交流が再開されると、公式的な朝鮮通信使の往来が始まる前、1607年、1617年、1624年すでに3回にわたって「刷還使（さっかんし）」という使節団が徳川幕府との交渉の末、約1,700人程度の朝鮮人を朝鮮に帰国させます。その後も朝鮮通信使の行列にひそかに交じって一定の人々が故郷の朝鮮に帰ったと推測されます。当然、彼らに対する資料や研究が必要ですが、当時の朝鮮の階級秩序を考えると大半両班でもない彼らに関する記録や資料は残っていません。どういう人達が九州長崎のどこに居て、どういう生活をしたのか。もちろん貧困と階級の封建秩序の厳しい朝鮮に戻るより、一定の生活が確保できるなら百姓どこに住んでも同じで結局、日本での定住を選択した人達も多数あり、そのまま九州長崎周辺に定着した朝鮮人がむしろ多かったと思われます。中でも恵まれた例外の代表的な人達が、焼物の陶工達でしょう。朝鮮に出兵して帰ってきた大名や領主、有力家臣が陶工の身分や生活を保障し、優遇して九州のあちこちに窯を作った事例です。例えば、皆さんよく知っている佐賀県の有田焼、唐津焼、鍋島焼、長崎県の波佐見焼、三川内（みかわち）焼、鹿児島県の薩摩焼、福岡県の上野（あがの）焼、小石原（こいしわら）焼、熊本県の八代（やつしろ）焼、その他、山口県の萩焼、遠く石川県の九谷焼など、です。

一方で逆に、朝鮮に帰った人達に関してもどういう身分の人達がどういう家族構成でどの地域にどれぐらいの人達が朝鮮に帰って定着し、その後どのように生活したのか、の記録や資料も残っていません。多分、日本の捕虜から帰ってきたことで村八分にされてかなりの抑圧と差別を受けながら生き延びたと思われます。韓国ソウル市の南山のふもとは、現在梨泰院（いうおん）とういう地名（本来は、異胎院、ソウル竜山区）、龍山の米軍基地があったところで、今はお洒落なバーやクラブなどが密集した繁華街で有名ですが、そもそも文禄・慶長の役の時、日本軍によって侵されて生まれた子供を集めてお寺（雲鐘寺、うんじょんさ）で生活させたことが由来で、以来、丙子胡乱以後も異胎児が集団生活した村として存続しています。

なぜこの話をするかと思えば、それは多分、日本から帰ってきた朝鮮人に対しても同じ差別的な待遇があったと思うからです。日本から帰ってきて元の故郷に帰り、安心して以前のような農民や漁民として定住できたでしょうか。記録や資料はありませんが、朝鮮の封建社会で、結構な差別を受け隔離された生活をせざるを得なかったと思います。捕虜になる前どうして逃げなかったのか、倭賊（わぞく）に協力したのではないか、日本に行つてどうして今更帰ってきたのか、また倭賊の侵略のスパイでもやるのか。彼らの多くは、村八分にされ差別抑圧された可能性が高いです。だから日本に行った多くの朝鮮人は、どうせ差別や貧困、階級秩序の下層の貧しい生活をするなら、どこでも同じ、朝鮮に帰ることを諦めて、そのまま九州長崎に定着し生活した人達が多くいたと思う訳です。

#### 4. 長崎の朝鮮人信者の生活と信仰に関する記録等

一方、長崎周辺にはキリシタンとなった信者を中心に数千人（少なくとも2千人以上）の朝鮮人が住んでいたと推定されます。とりあえず以下では、朝鮮人に関する既存の資料で確認できる文献記録を時代順に追って紹介しましょう。すでに知られている 主にイエズス会宣教師の書簡や書物による記録ですが、まず1594年パシオ神父の書簡では、日本に来た朝鮮人が カトリック教義を学んで、自分らの言語（ハングル）でカテキズムと祈祷書を書き、集団で洗礼を受け、その数は2,000人に達すると伝えています。私の解釈ですが、この時期の朝鮮人は九州訛りの日本語がまだ十分できなかったでしょう。どこかで当時のハングルで書いた祈祷文（オラシヨ）1枚でも出てくればそれは世紀の大発見になります。一緒に探しましょう。そして1596年日本の司教であったセルゲイラ神父が、キリシタン大名に朝鮮人の捕虜奴隷身分解放を勧告し、

実際小西行長や家臣達はそれを実行して、多くの朝鮮人がキリシタンに改宗し、信仰の自由がある長崎に徐々に集まって住むようになりました。最初、朝鮮人は鍛冶屋町周辺に居住していたようですが、長崎の人口が増え、外町が大きくなるにつれて、新高麗町に集団移住させられたと言われています。そこが現在の高麗橋がある伊勢町周辺です。

そして1610年のロドリゲス・ジラム神父は、朝鮮人信者が信心会を組織し、土地を購入してスペイン殉教者ロレンソを守護聖人とする素朴な聖堂を建て、祝聖式には朝鮮人と日本人信者が一緒に参加して、厳粛で盛大に行われたと伝えています。記録に出る聖ロレンソ教会がこれですね。しかし、その後1614年から始まった幕府の禁教令と徹底した弾圧の下、長崎のすべての教会は破壊され、時の長崎奉行長谷川権六の1620年代には、教会跡に多くのお寺と神社が建立されます。ご存知のように長崎市のあちこちにあった、イエズス会を始めとするフランシスコ会、ドミニコ会、アグスチノ会の教会跡は、歴史的な記録、遺構や瓦の発掘によって確認されております。今 旧県庁跡地は岬（みさき）の教会とイエズス会管区本部の跡地として発掘が進められています。しかし、残念ながら聖ロレンソ教会跡はどこにあったのか、未だその場所は確認されていません。

スペイン貿易商のアビラ・ヒロンの日記記録を見ると、1611から16年の間、数年間にわたっては毎年のようにキリシタン迫害に抗議する意味合いもあって、長崎では一度で1万、1.5万、2万人とほぼ長崎のすべてのカトリック信者が集まって長崎にあったすべての教会を回りながら、鞭打ちで血を流しながら苦行する十字架の聖体行列を行ったと記録しています。この中には、間違いなく2000人の朝鮮人信者と聖ロレンソ教会が含まれていたと思われませんが、残念ながらその関連の具体的な記録はありません。

ご存知のように1614年以後1630年代までは、長崎で厳しいキリシタン弾圧と迫害があった時期です。先ほどふれた長谷川藤正 権六は1614年から1626年まで長期間にわたって長崎奉行を歴任し、長崎のすべての教会と病院など教会関連施設を破壊した上で、その跡地に大光寺、大音寺、諏訪神社などお寺と神社を建立した人物です。55人が火刑と斬首となった1622年の元和の大殉教も長谷川による迫害です。長谷川の次が水野守信で 踏み絵と島原の雲仙地獄の拷問で有名です。もう一人は、遠藤周作の小説『沈黙』にもでるフェレイラ神父の棄教で有名な 悪名高き竹中重義采女正（うねめ）の穴吊り刑です。こうした1614年から1633年ごろまでの20年間は、厳しいキリシタン弾圧があった時期ですが、イエズス会宣教師は宣教方針の内部対立、財政逼迫、托鉢修道会との軋轢など様々な理由で表の宣教活動を自粛した時期です。一方、遅れて長崎の宣教に入った托鉢宣教会の宣教師達は、潜伏しながらも信者による慈悲組、兄弟組、信心会などの信仰活動を積極的に指導しました。

すなわち1614年以後も 托鉢宣教会の宣教師の指導の下、朝鮮人信者のミゼリコルディア（慈悲組）、秘密組織コンフラリア（信心会）の活動は維持されていて、それを1620年マテウス・ゴウロス神父は、朝鮮人信者が外国人であるにもかかわらず、牢屋に拘禁されたキリシタン信者仲間のため衣服を調達するなど、慈悲活動を続けていると記録しています。また聖ロレンソ教会は、多くの教会が破壊された1614年ではなく、1619年までに存続し、他に残っていた病院等教会施設と一緒に1619年に破壊されました。聖ロレンソ教会が1614年ではなく1619年まで存在したということは、多分、聖ロレンソ教会は宣教会宣教師による公式かつ大きな教会ではなく、朝鮮人信者の信心集会のための公会所、祈祷所（今の巡回教会の性格）で、規模と性格が異なった施設であったのではないかと推測します。こうした信心会を組織し、活動した朝鮮人信者の中から、1620-30年代の厳しい迫害の中でも棄教を拒否し、信仰を守って殉教した朝鮮人信者が多く出ており、現在、日本の教会で列福された朝鮮人福者は少なくとも10人います。（すく

なくともと言うのは、親子親族関係などから15人とみる見解もありますが、明確ではない

## 5. 長崎の古い地図で見る朝鮮人の痕跡

ここで江戸時代の長崎の地図をご覧ください。古い地図を見ると出島、旧県庁跡江戸町の岬の教会、唐人屋敷、中島川、鍛冶屋町、大光寺、大音寺、南光寺（今はない、朝鮮文字の棟札が発見されたと記録がある）、遊郭の丸山町と寄合町、西坂と本蓮寺、立山と長崎奉行所、今の桜町小学校や歴史民俗博物館、そして鍛冶屋町と重なって部落の皮田町があり、高麗橋のかかる新高麗町に伊勢宮、そして龍淵寺（今はない、今日の話の重要な手がかりを提供するお寺です）が確認できます。

それでは、聖ロレンソ教会はどこにあったのでしょうか。私は、まず托鉢修道会の出身地であるスペインの殉教者ロレンソが守護聖人であること、当時イエズス会と托鉢修道会が宣教方針と司教任命をめぐる対立し、イエズス会内部の財政的な混乱も重なって、イエズス会宣教師が表の活動を自粛している中、アウグスチノ会、ドミニコ会が朝鮮人教会の信心会を指導したこと、当時のアウグスチノ教会は朝鮮人の多く居住した鍛冶屋町近くの古河町（現在の常盤橋）の近くにあったこと、などから考えて、聖ロレンソ教会はイエズス会よりはアウグスチノ会、ドミニコ会の托鉢修道会と関連が深かったと推定します。その後朝鮮人が集団で移転された新高麗町は、今は伊勢町に変わり、そこには伊勢宮神社があることから、伊勢宮が聖ロレンソ教会跡に建てられたと主張する郷土学者や教会関係者がいます。聞いた話では、伊勢宮は韓国の教会関係者が県庁を訪問し、記念碑を建てることを頼んだことがあると聞いています。しかし長崎市史神社部によれば、「元亀・天正時代のキリシタン教徒により神社が破壊され、年を経たが、寛永5年（1628年）新高麗町民が官に請け神社を再興した」と書かれています。もともとあった伊勢宮神社は、キリシタンによって破壊され、その場所に再興されたということです。その場所に教会があったとか、何も書いてなく、多分、破壊されてそのまま放置された場所に、再び、伊勢宮が再興されたのではないかと思います。

しかし、先の江戸時代の地図をよくみると、今では消えてありませんが、同じ高麗橋すぐ近くに龍淵寺というお寺がありました。もう一方の長崎市史仏教部をみると、「諸説あるが、寛永8年（1631年）キリシタン宗門殄滅（てんめつ）に期し、許可を得て伊勢町に一寺を創建する」と記録しています。面白いことに龍淵寺は、当時の朝鮮と唯一の通商交易の窓口だった対馬藩の指示によって、対馬藩の蔵屋敷（現在の十八銀行本店がある）から朝鮮より漂流した漂着民を預かって収容し、取り調べの後に帰国させる間の保護寺となっており、また死んだ場合は、遺骨を安置し供養する「朝鮮寺」とも呼ばれていました。長崎の町で多くあったお寺の中で、どうして龍淵寺でしょうか。おそらく日本人の民間信仰として神聖な天照大御神の天皇家と深い関わる伊勢宮が朝鮮人の教会跡に建てられた可能性よりは、もともと朝鮮人と所縁のある龍淵寺があった場所が聖ロレンソ教会跡である可能性が高いと推測します。先日、親切な住職さんとも直接会って面談もしましたが、明治時代 龍淵寺は伊勢町一番地で、しかも中島川あたりまで広い立地だったと証言しています。今は都市開発で国道に覆われて大きなマンションが立ち並んでおり、聖ロレンソ教会の痕跡を見つけることはできません。住職さんの話では龍淵寺は、平成3年、都市開発のため道の尾に移転し、寺の名前も地福院と改めており、残念ながら過去の歴史についての記録や遺物は何も残っていないようです。

## 6. 長崎の朝鮮人の生活（鍛冶屋町と皮田町）

それでは、鍛冶屋町、皮田町、新高麗町に住んでいた当時の朝鮮人はどのような生活を営んでいたのでしょうか。これも資料や記録等はありませんが、一つ手がかりがあります。まず1614年以後迫害が本格化した時代を想像してみましょう。朝鮮人は日本に来て20年程度が経過し、大人は何とか九州長崎の方言なまりの日本語ができ、何かの職を見つけ定着してやっと生活に慣れる。年齢や男女の構成は分かりませんが、可能であれば朝鮮人同士で結婚し家庭を築き、子供も生まれたでしょう。子供は完全に日本語や長崎での生活習慣に同化し、日本人信者の家庭や子供達と一緒に暮らしていたと思われれます。しかし捕虜や奴隷身分から解放されたとしても、先祖代々の土地があるわけもなく、商売の基盤となる人脈もお金もない。そうすると朝鮮人信者達が生計を立てるためには、当たり前ながら自分の体、労働力を売る、他の有力武士、地主や商売人に雇われる。あるいは自分が持っている機能があればそれを駆使して生活を立てるしか方法がない訳ですね。陶工達が例外であったことは先ほど説明しましたがけれども、普通の百姓は、自分の労働力と機能があれば、それを道具として使うしかなく、初期の長崎での朝鮮人の集団居住地と言われる鍛冶屋町では、多くの朝鮮人信者達は力仕事の重労働である鍛冶職人として生活を営んだのではないかと思われれます。

そして皆さんは長崎の皮田町という町の名前をご存知ですか。江戸の初期、長崎は浦上川を挟んで西側を浦上淵村、現在の長崎駅から北東部を浦上山里村、今の港一帯を長崎、そして現在の伊良林や鳴滝（今はシーボルト記念館のある）地域を長崎村と、四つの地域に大きく分けたようです。この山里村には、皆さんご存知かもしれませんが、実は皮田町という被差別の部落が存在していました。実は、皮田町は現在の、鍛冶屋町と幸町に至るところで今の大音寺と皓台寺の境内とも重なる一帯に至るところです。ここで注目されるのは、鍛冶屋町と皮田町が隣り合わせで重なっていたというわけですね。そこの住民は1648年に、現在の西坂（馬込、まごめ）に移住させられて、その後長崎から皮田町の町の名前は消えたようです。

鍛冶屋町での朝鮮人信者達は、先ほど言ったとおり、鍛冶職人、その下張りの労働者として鉄物の武器、槍や刀の鑄造の他に、農業や生活に必要な様々な農機具や生活関連道具の鑄造、加工、修理などの鍛冶職人の仕事を生業として営んでいたとすれば、その鍛冶屋町と重なって隣り合わせた立地に皮田町が存在したことは、私は偶然ではなく、お互いつながっていると思います。なぜならば、当時長崎の部落であった皮田町では、鹿、牛、鮫など大量の皮革類が海外から輸入されて、多分、中島川を通じて運んできた皮を裁き、加工、細工、裁断、取引を行って、多くが大坂へ送られたようです。そのための加工場や商売のお店は、町の有力日本人の商人の所有でしょうから、朝鮮人はそこで働く下層の労働者、機能を身に着けた職人として雇われたと思います。輸入された原料の皮を加工し、裁断する労働作業は、身分的に低い白丁（はくちょう）の仕事です。江戸時代の「えた（穢多）」の非人身分は、朝鮮で言う白丁、下層の賤民と同じです。したがって彼らは皮を加工する作業に必要な様々な頑丈な道具が必要で、その道具を作って作業に使うことが欠かせなかったと思います。まさに鍛冶屋町と皮田町での朝鮮人信者達の労働と職業は密接につながっていて、貧しいながらも彼らの生活を支える基盤になっていたのではないかと推測します。鍛冶と皮加工は互いに関連した労働であり、その担い手はその地域に住んでいた朝鮮人信者達であったと思う訳です。ましては1620年代、毎年行われた西坂でのキリシタン処刑に必要な材木や道具を運び、刑場を設置し、また死体など後片づけの役割も命令されたのではないのでしょうか。すなわち、迫害が厳しくなった1610年—20年代の長崎の朝鮮人は、そのほとんどがカトリック信者で、鍛冶屋町と皮田町で鍛冶と皮加工の労働で下層の生活を営んでいたと思われれます。

繰り返しになりますが、奴隷から解放はされたものの、生活のための経済的な基盤がない朝鮮人信者達は、自分の労働力と機能を売って下層の賤民として集団生活を営んでいた。そして彼らは、1622年西坂でキリシタン55名が火刑（25名）と斬首（30名）によって処刑される元和の大殉教の時、西坂の刑場まで火炙り処刑に使う材木や道具を運び、刑場を設営し、死体を処理する過酷な役割を担っていたと思います。彼ら朝鮮人の大半はキリシタンで、1622年の元和の大殉教、1627年の雲仙地獄の迫害と殉教を目の当たりにし、自分も同じく信仰を守って殉教の道を歩む朝鮮人信者もいます。中には懸賞金目当てで奉行所に朝鮮人キリシタンを密告する朝鮮人もいたでしょう。また迫害の中、朝鮮人信者の一部は隠れキリシタンとなって浦上に移り住み、浦上四番崩れの祖先につながった人達もいれば、また一部は日本人信者と一緒に外海、五島に流れた隠れキリシタンになった人もいたでしょう。一方、私の大胆な仮説としては、やはり多くの長崎の朝鮮人信者は、これ以上の日本での迫害を避けてちょうどこの時期幕府と捕虜送還を交渉するため往来していた刷還使や通信使に同行して朝鮮に帰った人達がかかりいたと思います。3回の刷環使によって1,700人が朝鮮に帰りましたが、その中には長崎に住んでいた朝鮮人信者で多く含まれていた可能性があると思います。

## 7. 朝鮮のカトリック教会と長崎の関係

ここまで韓国の教会起源の話と長崎の朝鮮人の話を別々に述べてきましたが、そろそろ今日の結論として二つを繋げる仮説をまとめたいと思います。今までの説明を整理すると、1610-20年代の九州長崎には多くの朝鮮人信者が信仰共同体を形成し、下層の貧しい生活ながらもカトリック信仰生活を営んでいた。この時期はいよいよ壮絶なキリシタン迫害が激しくなる時期とも重なります。まさにこの時期、公式な記録だけでも九州長崎に来ていた約1,700人の朝鮮人が刷還使に同行し、朝鮮の故郷に帰ったのです。当然、多くのキリシタンが含まれていた可能性が非常に高い。当時はイエズス会や托鉢修道会によって日本からも中国からも朝鮮へ新しい布教のため宣教師派遣が何回も試みられており、実際、九州長崎で信仰生活を通じて、信者会の指導的なイルマンや同宿にまで成長していた朝鮮人信者や家族が迫害を避け、さらに宣教師の指導の下、信心会、秘密組織コンフラリアの経験も生かして、朝鮮での布教も志して朝鮮に帰った可能性は十分あり得る話です。

最初に紹介した韓国カトリック教会起源の諸説の中で、4説でも5説でも、両班南人知識層の実学者が中国からのカトリック教理書を学習中、聖霊の力で自生的に信仰が芽生えただけではなく、それより100年早い1650-1750年の17世紀、18世紀にかけての100年間、朝鮮では少数知識層の上からの信仰とは別に、一般民衆を軸に下からもカトリック信仰を受け入れて広がる土台、受け皿。小規模ながらいくつかの信仰共同体を形成できる基盤がすでに17世紀後半の朝鮮に点々と存在した可能性があるのではないかと推論したくなる。まさに九州長崎から帰ってきた朝鮮人信者達の存在です。すなわち、長崎や九州から帰った朝鮮人による信仰共同体の基盤が17世紀後半、忠清道や全羅道に存在し、それが18世紀後半の両班知識層の実学者による教理と結びつき、その種子が韓国のカトリック教会の基礎になり、広がる拠点となったのではないだろうか。だからこそ迫害が始まると多くの知識層が棄教背教する中、20-30年の短期間で多くの名も知れない民衆による殉教者を生み出しながら厳しい迫害に耐え、韓国カトリック教会に礎（いしずえ）につながったのではないだろうか。

1640年代になると長崎は、キリシタン弾圧も一段落し、表舞台から長崎のキリシタンの姿が消えた時期になります。長崎からほぼほぼキリシタンがいなくなり、朝鮮人信者も殉教する人

は殉教し、隠れキリシタンとしては潜伏し、また朝鮮に帰る人は朝鮮に帰り、多く長崎に残った人達は長崎の定着し、転びキリシタンとして仏教徒の生活をしていたと思われる。

その事例が 長崎平戸町の宗門改帳（寛永19年、1642年）にある川崎屋助右衛門という人物の一例です。長崎の朝鮮人転びキリシタン家族の生き様が分かる記録ですね。「年齢60歳、高麗生まれ、12歳に長崎の肥前に連れてこられ、1614年キリシタンになったが、（竹中采女正、うねめ）の代に棄教し一向宗に帰依。女房53歳、高麗生まれ、10歳に熊本の肥後八代に連れてこられ、22歳にマカオへ売られ受洗キリシタンとなったが、1616年長崎に戻り棄教。娘たつ19歳、息子猪の介16歳、生まれながらキリシタンであったが、しかし物心ついた時には棄教。彼らは高麗出身で転びキリシタンであったことから、町内での監視と請状の提出が命じられる」と書かれてあります。この川崎屋の場合、寛永19年（1642年）の平戸町宗門改帳ですから、肥前に連れてこられたのが12歳、それが1593年だとすれば、洗礼は1614年には33歳、竹中采女正の1630-33年の間ごろ棄教し、それから10年後1642年61歳の宗門改帳の記録ということになります。

## 8. ある朝鮮人信者の生き様に関する小説的な仮説

ここで小説的な仮説として、長崎から朝鮮へ帰って信者の物語を想像してみよう。まったく別の一人の生き様を描いてみました。

同じく川崎屋助右衛門、13歳の時、1593年忠清道で小西行長軍に捉えられ、捕虜として肥前に来て奴隷生活をし、運よくマカオなどに奴隷として売られることなく有力家臣の家で誠実に働く。1596年19歳の時、セルゲイラ司教の朝鮮人戦争捕虜の身分解放の勧告に従い、小西行長配下の家臣達の朝鮮人奴隷は開放され、その時、カトリックの洗礼を受ける。以後信仰の自由が許される長崎に定着し、鍛冶屋町や皮田町で鍛冶の仕事、皮加工の仕事（下層民、白丁の仕事）をしながら、マカオに売られたが長崎に帰ってきた朝鮮の女性と結婚し家庭を築き、一男一女を設ける。熱心に信心会や慈悲組のリーダー的な信仰活動をしながら、自らも同宿となりイエズス会や托鉢宣教師の布教活動を助ける。

そして30歳1610年には、周りの朝鮮人信者と協力し奉納金を集め、新高麗町の一角にある土地を購入し、小さいが朝鮮人の信仰活動の拠点となる公所的な聖ロレンソ教会を奉納する。セルゲイラ司教による朝鮮人、日本人信者が多く参加した献堂ごミサを厳粛に捧げる。しかし34歳1614年以後長崎にキリシタン弾圧と迫害が激しくなる中、修道会の主な教会や関連施設も破壊される中、何とか秘密のミセリコルディア活動を隠れながら遂行したが、同僚の中では捕まり殉教するものも多く、棄教し転ぶ信者も現れる。そしていよいよ39歳1619年朝鮮人信者の寄り所で信心会活動の舞台であった聖ロレンソ教会が密告によって発覚され多くの関連者が捉えられ鈴田の牢獄に送られた。しかも42歳1622年西坂で火刑と斬首で55人の信者や仲間が殉教する元和の大殉教を目の当たりにするが、川崎屋は何とか難を逃れ、今後どうするか潜伏した宣教師と相談する。

結論は、当時江戸幕府と朝鮮人捕虜の朝鮮帰還を交渉する刷還使が日本にきており、44歳1624年3回目の刷還使の帰国に合わせて朝鮮に帰り、故郷での宣教を志すことを決める。周りの朝鮮人信者家族とも相談し、合わせて100世帯500名の信者が朝鮮に帰ることを決めた。しかし故郷の忠清道の人達の態度は冷たく、川崎屋の家族や一緒に朝鮮人に対し、偏見、差別の目を向け、子供達の出生や身分についても蔑視する状況に直面する。耐えきれず、一緒に家族達と相談し、20世帯100人を一集団として5つのグループに分かれて、忠清道2や全羅道2、慶尚道1

の山奥に入り、火田民として、オングや木炭を売って生計を立てる。貧しいが、信仰共同体を維持することができ他の家族と一緒に信仰生活を守る指導者の役割を貫いた。村ごとお互いに連絡を取り合い、朝鮮での12年間、時々日本にいる宣教師とも連絡を取りながら、集団の中には大半が洗礼を受けた信者であったため、司祭による告解（赦しの秘跡）はできないが、洗礼を代々受けながら信仰を守ることができた。そして56歳1636年亡くなる。以後、彼の子孫は、他の地域の信者達との結婚を通じて、家庭と信仰共同体を維持しながら3世代100年が経過する。こうした朝鮮人の小説的な生き様の物語は、けっして遠藤周作の小説に劣る内容ではない。

しかし残念なことにこういう記録や遺物が 1663年寛文の大火、長崎大火で長崎奉行所を含め町の八割が喪失したことによって、また何より1945年8月9日の原子爆弾ファット・マンによって長崎が再び焼け野原に破壊されたことによって、私の仮説を立証できる多くの貴重な教会関連の歴史記録や遺物、遺跡がなくなってしまったことが本当に悔やまれる。とにかく、今後より多くの関心と研究が必要であると強く思う次第です。

## まとめ

今日の話の結論をまとめたいと思います。

1. 1600-20年代の長崎の朝鮮人（信者）は、どこでどのような生活を営んでいたのか。また彼らの信仰生活の実態はどうだったのか。未だに不明な点が多いですが

彼らは鍛冶屋町、皮田町、新高麗町、西坂（馬込）で居住しながら鍛冶職人、並びに皮加工の下層民としての貧しい集団生活をしながら、信心会、慈悲組など信仰生活を通じて中には同宿やイルマンの教会のリーダー的存在も生まれており、殉教福者が少なくとも10人も出るほどの篤い信仰生活を営んだ。

2. 聖ロレンソ教会の跡地はどこなのか。

高麗橋そのものは唐人によってかけられたようですが、高麗橋付近の新高麗町（今の伊勢町）での朝鮮人教会は、伊勢宮ではなく、対馬藩や朝鮮人との関係が深い龍淵寺の可能性が高い。聖ロレンソ教会は、修道会が建てた公開的な大きい教会ではなく、托鉢修道会との関係がある信心会、慈悲組活動を支える集会のための公所、祈祷所的な施設であった可能性が大きい。

3. 1622年長谷川による元和の大殉教など迫害が厳しくなる中、朝鮮人はその時代をどうように生き延びていたのか。そしてその子孫はどうなったのか。

朝鮮人信者の多くは長崎に定住し、棄教（背教）をし、絵踏を踏みながら近くのお寺の檀家となり、宗門改め日本人に同化し定着して生きていたと思われる。反面、信仰の篤い信者の中からは多く殉教者も出ている。人間社会ですから、懸賞金狙いで信者を密告する同胞の朝鮮人もいれば、また隠れキリシタンとなって浦上、外海、五島に流れた家族もいたでしょう。様々な生き様があったと思います。そして少なくともかなりの規模で、1610年-30年代、迫害を避け数回にわたり刷環使や通信使と一緒に朝鮮に帰った信者も多かったと思われる。この時代、朝鮮ではまだ迫害があった時代ではなく、彼らは朝鮮での宣教も志しながら、下からの民衆の信仰共同体を形成維持したと思われる。

4. 朝鮮に戻った信者達はどこでどのような生活を営んで生きていただろうか。帰ってきた信

者達は、朝鮮でも差別、村八分、偏見、抑圧のつらい生活を余儀なくされただろうと思われれます。したがって、辺境の農村、あるいは山奥、島に入って窯を作り、朝鮮の日常生活で使う甕器（オンギといううつわは、キムチ、醤油、漬物などの貯蔵に使う生活道具、器）、あるいは木炭（炭火）を作って売って生活を維持した、また火田民となって山奥の山畑を開拓しながら、苦しくとも信者共同体を形成しながら、生活したのではないか。実際19世紀の朝鮮の迫害時代には、多くの信者が迫害を避けて山奥に隠れるが、すでに17世紀にそうした隠れの生活が始まったのではないか。

5. そして18世後半から中国から両班知識層によるカトリック教理と信仰が朝鮮に入ってきたとき、いわゆる上からの知識と、すでに存在していた下層、下からの信仰の基盤がつながり、その後の全国的な信仰の広がり、信者の受け皿、母体になったのではないだろうか。だからこそ19世紀前半の厳しい迫害時代、多くの殉教者を生み出すことができたのではないだろうか。

小説的な想像ですが、例えば、日本から帰ってきた朝鮮人信者が1000人いたとすれば、5人家族で20世帯、100人程度の村が、朝鮮全土全10か所に共同体を形成できる。1650-1750年代の100年間を3代、4代続く、長崎での秘密組織コンフラリアの経験を活かし、互いに秘密裏に交流し、結婚し家庭を築き信仰を守りながら生活できるのではないか。宣教師も不在の中、または多くが背教棄教する両班知識人層と違って、すでに日本長崎できちんとした教理と典礼と信仰を学んだ下層からの小規模な信仰共同体の維持が可能ではなかっただろうか。

以上、私の仮説的な韓国教会の起源に関するお話を終わります。冒頭でもお話しした通り、今日の仮説は結構無理な論理構成、小説的な物語になっている部分もあるかも知れません。当然、今後、日韓の資料、記録、遺物等の発掘と研究が必要であり、皆さんの関心と協力をお願いしたいと思います。何でも結構ですのご連絡ください。よろしく申し上げます。ご静聴ありがとうございました。

**連絡先:** [tshlee21651@hanmail.net](mailto:tshlee21651@hanmail.net)

- (注1) ここで言う両班（やんばん）とは、文官と武官で構成される朝鮮時代の支配階級で、近世以後は様々な党派に分かれて対立し、中央政権での権力闘争を繰り返した負の側面を持つ。
- (注2) 金範禹（キムボムウ、1751-1787）は、階級的に中人ながら4説の両班グループの若い人達と交流し、一緒に自分の家に集まってカトリック教理書の勉強をする最中、当局に摘発されてみんな捕らわれるが、両班子弟は全員訓告で釈放された反面、中人という階級的差別で金範禹だけは処罰を受け、流刑地で結局死んでしまう。そういう意味で韓国のカトリック信者として最初の死者と言われますが、教会が公式に認める殉教者ではない。
- (注3) 李晔光が生きた1600年前後の時代は、まさに1570年代長崎で教会が建設され、豊臣による禁教令を経験しながらも教会が発展した後、1614年以後本格的な迫害に直面する時期に重なる。

- (注4) 洪吉童伝というハングル小説は、階級身分が徹底した朝鮮で嫡子ではなく庶子の身分で生まれた主人公がユートピアの建設を夢見る物語で、ある意味、封建階級体制に対する反体制の革命的なストーリーである。
- (注5) 金大建神父は、1837年16歳で彼らに選ばれて他の少年二人と3人でマカオに行き、1844年助祭に叙階され、一時朝鮮に帰国した後、1845年24歳で上海の金家港（きんかこう）教会で司祭に叙階される。しかし残念ながら翌年わずか1年で朝鮮での宣教活動の途中、わずか25歳で殉教した聖人である。
- (注6) 実際、西坂では1624年朝鮮人福者の一人、カイヨが火炙りで殉教しており、大村では鈴田牢屋から遠くない空港近くに方虎原（ほうこうばる）殉教地がありますが、1624年、30年、58年の郡崩れで殉教した信者達の顕彰碑があり、その中には13人の朝鮮人殉教者の記念碑も建てられている。
- (以上)